千葉薬品社長賞

八巻孝之様/オランダ/62歳/男性/医師/妻にあてた手紙

沈黙の光

沈黙の光のようなひと、裕子へ。

私たちの記念日は、婚姻届よりも早く始まった。あの小さな部屋で交わしたささやかな日々。それが、私たちの世界の起点だった。

三十五年の歳月を経て、今、オランダの風の下からあなたへこの手紙を送る。

思い出す、二十年目の夜のこと。激しい口論のあと、私は素直になれず、言葉より沈黙を選んだ。帰宅すれば灯っていたキッチンの光、あなたのため息のやわらかな温度。その静けさが、今も胸に沁みる。

長い間、私は仕事にかまけ、家の灯をあなたに任せきりだった。白衣の重みを脱ぎきれずにいた私に、あなたは保健師として働きながら三人の子を育てた。ありがとう。すれ違いや争いもあったけれど、それらは家族名の詩を編む一片にすぎなかったのだと、今、思う。

六十一歳の誕生日、私は夢を告げた。「作家になりたい」と。あなたは笑わず、それを受けとめた。その理解が、今の私をここへ導いた。成田で見送られたあなたの背中を、私は今も閉じた目の裏で見ている。

遠く離れても、朝のコーヒーの香りや「おかえり」と囁く声が胸をよぎる。そのたび、私はあなたのいる日本の空へ、ひそかに息を送る。

どうか、あなたの毎日が少しずつ光を増す真珠のように、静かに輝きつづけますように。

私はその光に導かれながら、またあなたに手紙を書く。十年後も、二十年後も。